

パリ通信・第162号

聖霊降臨祭

6月8日(日)「聖霊降臨祭」(ペンテコス)である。復活祭から50日目、昇天したキリストの霊が地上に降りて来たことを祝うカトリック教徒の祭日だ。この日私はローマにいた。今年2度目のローマで朝から30°を超える真夏日、日陰を歩いても汗だくになった。バチカン宮の西アウレリアの丘を登ったところが宿で、信者や聖職者などが利用している安い宿泊施設だった。炎天下、朝早くからサン・ピエトロ広場へ向かう大勢の人で道が溢れていた。



フランシスコ教皇が4月に死去、新ローマ教皇に選出されたレオ14世のミサを聞きに世界中から集まった人たちで、暑さも長蛇の列も苦にならぬ風だった。道路規制や警備はもとより、各所に赤十字テントが張っており、具合が悪くなったり助けが必要な人の対応をしていた。さすがに1時間以上並ぶ元気はなく、テベレ川を渡って対岸の「洗礼者聖ヨハネ聖堂」(バジリカ・サン・ジョヴァンニ・バッティスタ・デイ・フィオレンティーニ)に入った。16世紀に建立が始まったローマのフィレンツェ人教会である。ローマ中の教会で「聖霊降臨祭」ミサが行われ、大きな鐘が鳴った。



在位中は気にすることもなかったが、フランシスコ教皇からレオ14世教皇に変わり、法王にも人柄があることを実感した。フランシスコ教皇の墓はバチカンに所属する「サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂」の中にある。生前からバチカン宮やサン・ピエトロ大聖堂ではなく別館である聖マリアの下に埋葬されることを希望していた。彫刻も絵画も一切なく本当に質素だった。墓石と十字架のみで何の装飾もなく、法王のお墓とはとても思えない。

昨年12月のパリ・ノートルダム大聖堂修復記念祭には敢えて参列をせず、コルシカ島を訪問された。白い法衣だけのことが多く、純金の指輪、派手な金糸刺繍を施した赤い法衣を身につけることは稀で、貧しい人々に寄り添う法王様であった。

新ローマ教皇レオ14世はトランプ大統領とゼレンスキー大統領の仲介を務め、政治的な介入に積極的のようである。身につけている法衣や装飾品も立派で人目を引く豪華さである。267代カトリック教の頂点に立つ教皇であるからその影響力は今なおあるだろう。ウ

クライナ戦争やガザ紛争、法王の影響で戦争が終わるなら嬉しい。69歳の若い教皇であるからこれからに期待されているようだ。



今回のローマ滞在では期せずしていくつかの墓石見るようになった。
フランシスコ教皇が眠る「サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂」にはローマ・バロック芸術の大家ジョヴァンニ・ロレンツォ・ベルニーニ(1598-1680)家の墓が、(写真左)こちらもとても質素で知らないと思落としそうなところにある。

パ
ンテオンにはラファエロの墓石があり、パンテオンのすぐ側「サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂」にはフラ・アンジェリコ(1395-1455)の墓石がある。(写真右)



そしてその隣にはミケランジェロの「贖い主イエス・キリスト」(通称「ミネルヴァのキリスト」)(1519-1520作)が大きな十字架を持って我々を見守っている。



ローマは真に特別な地だと思った。地下鉄を掘ろうとすると遺跡が出てきて工事は進まない。何世紀も前の芸術家の作品や墓石を見ながら日常のミサが行われる。教会の礼拝堂にはフラ・アンジェリコ、ラファエロの絵、ミケランジェロやベルニーニの彫刻が当然のように置かれている。芸術や価値観が受け継がれていると感じた。



3月7日から7月6日までバルベリーニ美術館で開催中の「カラヴァッジョ展」も見ることができた。25点が展示、ナポリの「聖オルスラの殉教」が最後を飾っていた。早くにチケットを完売しただけあって凄い人だった。随分前に小原先生と一緒に見たマドリッド「テイッセン・ボルネミッサ美術館」所蔵の「アレキサンドリアの聖カテリーナ」(1598年頃)が見れたのは嬉しかったが、教会や修道院を訪ねて一つ一つ丁寧に作品を見る感動はなかった。まとめて多くの作品を見ることができる展覧会は有り難いが、本来あるべきところにある作品が訴える力とは別のように感じた。パリに戻る飛行機は「聖霊降臨ミサ」帰りの人も多く、写真やビデオを繰り返し見ている姿が目をつけた。

(古賀順子記、撮影)